

## 親の性意識が性教育に及ぼす影響 —父親と母親のセックス観をもとに—

高橋 久美子

(福岡教育大学教育学部)

原稿受付平成 14 年 6 月 6 日；原稿受理平成 14 年 10 月 22 日

### Effects of Parents' Sexual Awareness on Sex Education —Focusing on the Attitudes of Fathers and Mothers toward Intercourse—

Kumiko TAKAHASHI

*Faculty of Education, Fukuoka University of Education, Munakata, Fukuoka 811-4192*

The aim of the present study is to examine how fathers' and mothers' sex cognitions influence their sex education at home by focusing on their attitudes toward intercourse. Analytic models are 188 pairs of fathers and mothers who have junior high school students. Findings are as follows: In each sex cognition contained in 5 portions, mothers are more denial and ascetic than fathers. There is a great difference in attitude between fathers and mothers toward the affirmation of pleasure and a view that women are instrumental to sexual satisfaction for men. On the mothers' side, the section of ascetic necessity is closely related to the portions of affirmation of pleasure and men tend to see women as sexual targets. About 50% of both fathers and mothers hesitate to discuss sexual matters with their children. Unexpectedly, there are many parents who can keep their composure when a love scene goes on the air while they watch TV with their children. In addition to this fact, 50% of mothers are also able to keep their composure. The same number of items, 5 out of 10, was chosen respectively by fathers and mothers as the item that should be picked up as contents of sex education at both school and at home. However, these contents of each portion that should be taken in at school and at home show contrast with each other. There are only 2 or 3 items that actually parents could take in and deal with their children. Both fathers' and mothers' facts show that there is a close relationship between an educational need and what is actually taught at home. In the latter, it is directly related to the fathers' reluctance toward a talk related to sex, while it is indirectly related to the mothers' awareness of the necessity of sex education at home. Moreover, in their sexual cognition, there is a relation between the awareness of ascetic necessity and the reluctance or resistance to having a talk on sex.

(Received June 6, 2002; Accepted in revised form October 22, 2002)

**Keywords:** sex education 性教育, sexual awareness 性意識, father and mother 父親と母親, attitude toward intercourse セックス観.

#### 1. 課 題

これまで青少年の性については早熟化の傾向や性開放の現象などが社会的な関心事となり、数多くの研究がなされている。しかし、夫婦間の性については当然であり自明であるために問題にされることが少なかった。夫婦の性意識や性行動についての実証研究は乏しく、性教育との関連では取り上げられていない。本報

告の目的は、親の性意識のなかでもとくにセックス観に注目し、父親と母親のセックス観が性教育に及ぼす影響を分析し考察することにある。

今日では家庭でも性教育が必要であると考えられる親は多い。しかし、そのための実践はあまりなされていない。家庭で性教育への意識的な取り組みが乏しいという問題は、親の性に対する否定的で禁欲的な態度に原

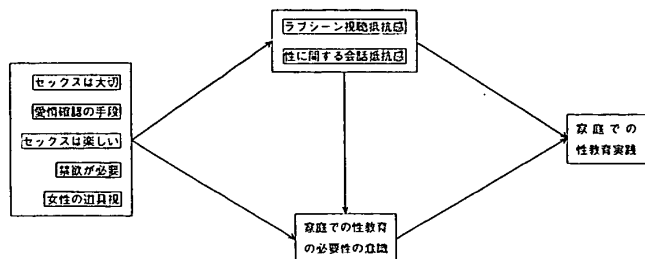


図1. 研究の枠組み

因があるのではないかと考えられる。性教育をするには、性に関する事柄や男女関係について話し合ったり指導したりしなければならないが、親と子の間では話題にしにくく、家庭で性教育への取り組みを妨げる要因になっていることが指摘されている（藤田 1980；東京都性教育研究会 1987；武田 1991；大阪教育文化センター「家庭調査」研究会 1999）。

性に関する事柄を話題にすることへの抵抗感は、子どもに対する場合に限ったことではない。それは性愛の対象である夫婦の間においても同様である。互いの感情や考え方を伝え合うための会話は、日常の出来事に限らずセックスについても必要であると思われるが、16～69歳の男女を対象としたNHKの性に関する実態調査によると、配偶者や恋人との間で一般的な会話をよくしている場合でもセックスについての会話は乏しい（NHK番組制作局とNHK放送研究所 2000）。共同通信社による夫婦の性生活についての調査では、性的感情や欲求を伝えたり話し合う夫婦は性の充実度が高い。アメリカに比べて日本では話し合わない夫婦が多く、その割合が妻では半数もいることが報告されている（石川等 1984）。夫婦や親子の間の性に対する抑圧的態度は、家庭外における性情報の氾濫との間に大きな落差を生じている。

性は多面的で複雑な概念であり、セックス、ジェンダー、セクシュアリティの要素が含まれることについては前報（高橋 1999）で述べた。そのような学術的な定義に対し、日常生活においてセックスという語は性交渉の意味に限定して用いられることが多い。本報告では、セックスを日常的用法で使用する。

性的な欲求や感情をどう受容し、表現し、満足させ、責任をもつかについて理解させ考えさせることは、性教育の中心的課題の一つであるといえる。性的な欲求の表出と充足そして抑制を通して築かれる男女の関係や生き方について、子どもと話し合い指導するには、親のセックスに対する態度や考え方が問われることに

なるだろう。親が否定的で禁欲的なセックス観をもっている場合は、性に関する事柄や男女関係を話題にすることへの抵抗感が強く、性教育に対して消極的になるのではないかと予想される。

## 2. 研究方法と調査対象

図1に研究の枠組みを示した。セックス観の内容は、高校生の性をめぐる意識と行動について東京都生活文化局が行った調査のなかの性意識に関する項目を参考にした（東京都生活文化局 1982）。中年期にある親世代にも適用でき、夫婦間の性意識の特徴を把握できる項目として取り上げた。具体的には、「セックスは人間にとって大切なものである」「愛を確かめ合うためにはセックスが必要である」「セックスは楽しいものである」「性的欲求はできるだけおさえるべきである」「男性は女性をセックスの対象としてしか見ていない」の5項目である。回答は「そう思う」から「そう思わない」までの4段階評価とした。

性教育をするうえで会話は最も基本的で重要な手段である。さらに今日では、家庭内にあっても視覚的性情報に晒されることが多く、それらの映像などを活用することも必要となる。すなわち、性教育をする側の親にとって、性に関する会話と映像に対する罪悪感や羞恥心の克服が課題になる。そこで、「性に関することを人前で口にすべきではない」という考えに対する賛否と、子どもとテレビを見ている時のキスシーンやベッドシーンでの対処行動を尋ねた。性に関する会話への抵抗感は子どもとの間に限らず広く一般的な状況を想定し、ラブシーン視聴への抵抗感は子どもと同時視聴の場合に特定してとらえた。

性に関する会話と映像への抵抗感を性教育の実践に作用する抑制（pull）要因と考えたのに対し、促進（push）要因としては、実践への動機づけの働きをもつと考えられる家庭での性教育の必要性の意識を取り上げた。性教育の内容を10項目にまとめ、家庭で子どもと話し合ったり指導したりする必要があると思う項目を選択してもらった。性教育の必要性の意識についてはとくに、学校への依存が家庭での実践を乏しくするという問題が想定されたので、家庭での必要性の意識だけでなく学校での必要性の意識も尋ねた。家庭でなされた性教育の実践については、必要性の意識と同一の10項目を用い、これまでに子どもと話し合ったり指導したりしたことがあるという事柄を選択してもらった。

親の性意識が性教育に及ぼす影響

調査の実施時期と方法などは前報で述べた（高橋 1999）。調査対象と分析サンプル数は、中学生の子どもをもつ父親と母親 188 組（男子の親 101 組，女子の親 87 組）である。父親の 85% と母親の 75% が 40 歳代の中年期の夫婦である。

3. 分析結果

(1) 父親と母親のセックス観

図 2 から、父親と母親のいずれも「セックスは大切」「愛情確認の手段」「セックスは楽しい」では肯定する者が、「男性による女性の道具視」では否定する者が大多数を占めている。「禁欲が必要」では父親と母親の考え方の大勢は異なり、母親は肯定する者が多いのに対し、父親は否定する者が多い。

さらに、5 項目のセックス観の全てにおいて父親と

母親の間で統計的に有意の差がみられ、セックスに対して一般に父親は母親より肯定的考え方をもち、逆に母親は父親より否定的考え方をもっている。とくに快樂の肯定の項目と男性による女性の道具視の項目で差が大きい。セックスは楽しいという父親は 9 割を占め、男性にとってセックスは快樂と結びついていることが明白であるのに対し、母親では 6 割程度である。女性を道具視しているという男性像をもつ者が父親でも 2 割いる。しかし、母親ではその倍の 44% であり、半数近くの母親が男性に少なからず不信感を抱いているという実態がある。そしてそのことが、セックスに禁欲的態度をもつ母親が多いことと関連がある。

表 1 に 5 項目のセックス観の関係を示した。父親と母親それぞれについてセックス観の要素間関係を分析し、その結果を一つの表にまとめた。父親と母親に共通にみられる点として、セックスを愛情確認の手段と考える者やセックスを楽しいととらえている者は、セックスを大切と考える者が多いことが挙げられる。さらに母親については、愛情確認の手段と快樂の肯定の項目との間で関連がみられ、愛情確認の手段と考える者はセックスを楽しいととらえる者が多い。母親の場合は、快樂の肯定と禁欲の必要性の項目との間でも関連がみられ、セックスを楽しいととらえない者は禁欲が必要という者が多い。そして母親は、禁欲の必要性と男性による女性の道具視の項目との間でも関連がみられ、禁欲が必要という者は女性は性欲を満たす手段という男性像をもつ者が多い。

(2) 性に関する会話とラブシーン視聴への態度

「性に関することを人前で口にすべきではない」という考えに対する賛否と、子どもとテレビを見ている時のキスシーンやベッドシーンでの対処行動を、表 2

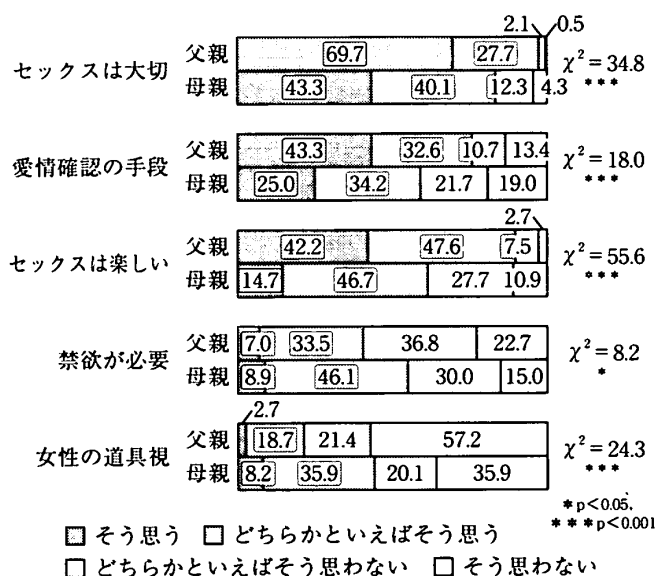


図 2. 父親と母親のセックス観

表 1. セックス観の要素間関係

母親 \ 父親	セックスは大切	愛情確認の手段	セックスは楽しい	禁欲が必要	女性の道具視
セックスは大切		16.2***	13.9***	0.0	1.0
愛情確認の手段	20.7***		3.7	2.8	0.0
セックスは楽しい	37.0***	34.5***		0.1	0.3
禁欲が必要	1.0	1.6	10.8***		0.8
女性の道具視	0.9	0.0	0.7	9.3***	

「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合計、「そう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」を合計し、父親と母親それぞれについてセックス観の要素間関係をカイ 2 乗検定し、その結果を一つの表にまとめた。\*\*\* $p < 0.001$ .

表2. 性に関する会話とラブシーン視聴への態度

	父親	母親
「性に関することを人前で口にすべきではない」との考え		
賛成	11 (6.0)	6 (3.3)
どちらかといえば賛成	74 (40.7)	80 (44.0)
どちらかといえば反対	74 (40.7)	77 (42.3)
反対	23 (12.6)	19 (10.4)
計	182 (100.0)	182 (100.0)
子どもとテレビを見ている時のキスシーンやベッドシーンでの行動		
何とも思わずそのまま見ている	114 (63.7)	90 (50.8)
そのまま見ているが落ち着かない	51 (28.5)	72 (40.7)
チャンネルを変える	12 (6.7)	5 (2.8)
何か他のことをする	1 (0.6)	6 (3.4)
その場を離れる	0 (0)	3 (1.7)
その他	1 (0.6)	1 (0.6)
計	179 (100.0)	177 (100.0)

性に関する会話への態度を「賛成」と「どちらかといえば賛成」を合計、「反対」と「どちらかといえば反対」を合計し、ラブシーン視聴への態度を「何とも思わずそのまま見ている」とそれ以外に分類し、性に関する会話とラブシーン視聴への態度の関連について検定した結果、父親  $\chi^2=12.2$  ( $p<0.01$ )、母親  $\chi^2=0.8$  (n.s.).

表3. 性に関する会話とラブシーン視聴への態度に対するセックス観の関連

	父親		母親	
	性に関する会話抵抗感	ラブシーン視聴抵抗感	性に関する会話抵抗感	ラブシーン視聴抵抗感
セックスは大切	0.6	0.8	0.9	0.9
愛情確認の手段	0.3	8.2**	0.0	0.5
セックスは楽しい	0.0	1.5	1.5	0.0
禁欲が必要	15.3***	4.0*	8.3**	1.6
女性の道具視	0.1	0.1	0.2	0.0

カイ2乗検定の値を示した。\* $p<0.05$ 、\*\* $p<0.001$ 、\*\*\* $p<0.001$ 。

に示した。セックス観に比べて性に関する会話と性描写の映像に対する抵抗感は、父親と母親の間での意識の差は小さい。性に関する会話の是非は子どもに対する場合に特定せず一般的状況についての設問であるが、父親と母親のいずれも積極的反対は1割程度であり、消極的賛成と消極的反対が4割と同程度に多数を占めている。父親と母親で差がなく、性に関する会話をタブー視し抵抗感をもつ者は約半数である。

子どもとのテレビ視聴時のラブシーン場面での対処

行動については、「何とも思わずそのまま見ている」という者は母親より父親の方が多し。しかし、日常生活で一般にみられるポルノ雑誌やビデオなどへの接触の仕方における男女差から、母親の場合とはくに、性を描写した映像に対して羞恥心や抵抗感が強いと予想したが、さらに性描写の映像については子どもと一緒にの場面に特定して尋ねたのだが、平静という者が母親でも半数に達し、その数は予想に反して多い。父親と同様に母親の場合も、映像よりも会話に対して抵抗感

親の性意識が性教育に及ぼす影響

表 4. 選択された項目数の平均と標準偏差

	父親		母親	
	平均	SD	平均	SD
家庭で必要と思う性教育	5.3	2.4	5.6	2.7
学校で必要と思う性教育	5.4	2.5	5.1	2.6
家庭でなされた性教育	1.6	1.9	2.8	2.2

表 5. 家庭での性教育の必要性の意識に対する性に関する会話とラブシーン視聴への態度とセックス観の関連

	父親	母親
性に関する会話抵抗感	4.5	11.5**
ラブシーン視聴抵抗感	3.0	7.0*
セックスは大切	2.8	6.5
愛情確認の手段	2.3	4.3
セックスは楽しい	6.0	2.7
禁欲が必要	13.5**	2.7
女性の道具視	1.7	2.0

家庭での性教育の必要性の意識を、家庭で教える必要があるとして選択された項目数をもとに均等になるように3分類 (0~4, 5~6, 7~10) し、カイ2乗検定を行った。\* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$ .

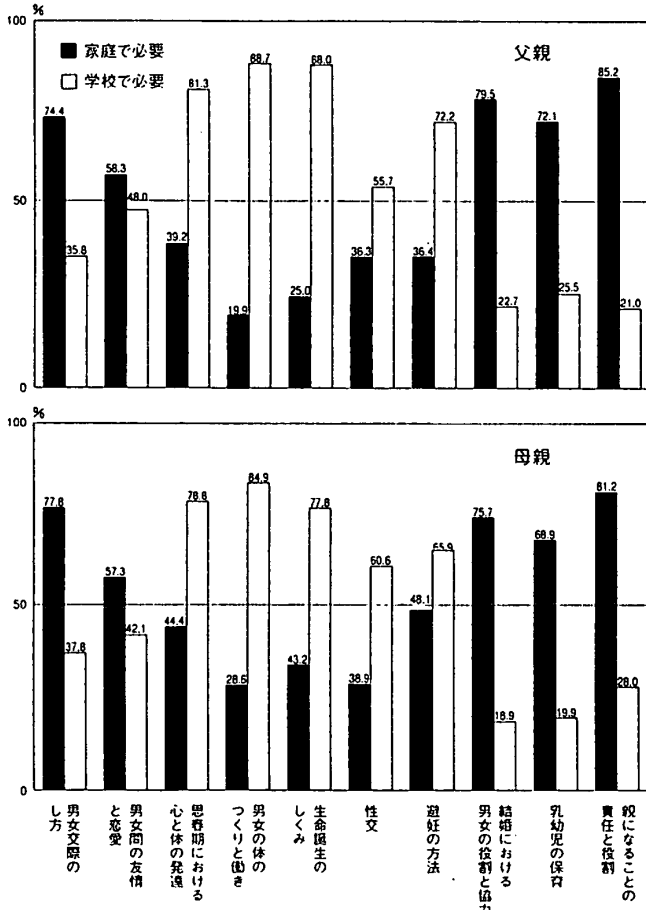


図 3. 家庭や学校で必要と思う性教育の内容

が強いのではないだろうか。

性に関する会話とラブシーン視聴への抵抗感の間の関係は、父親についてのみ統計的に有意の差が認められた (表 2)。父親の場合は、会話への抵抗感がある者は映像への抵抗感もあるという者が多い。

さらに5項目のセックス観が及ぼす影響について検討した結果を、表 3 に示した。父親と母親のいずれも、禁欲の必要性の意識と性に関する会話抵抗感の間で有意な関連がみられた。父親も母親も、禁欲の必要性を認める者は性に関する会話への抵抗感がある者が多いことが挙げられる。父親の場合は、禁欲の必要性の意

識が子どもと一緒にラブシーン視聴に対する抵抗感とも関連があり、禁欲の必要性の意識は性に関する会話だけでなく性描写の映像への抵抗感にも影響を及ぼしている。

(3) 性教育の必要性の意識

親は家庭でも性教育をする必要があると考えてはいるが、それ以上に学校でなされることを期待しているために、すなわち、学校への依存が家庭での実践を乏しくしているのではないかと予想された。だが、性教育の内容として取り上げた10項目について選択された項目数の平均値を比べると、父親と母親のいずれも家庭で必要と思う項目と学校で必要と思う項目はほぼ同数の5項目程度である (表 4)。選択項目数という量的な面での必要性の程度に関していえば、父親と母親は学校と同じ程度に家庭でも性教育が必要であると考えている。

家庭での性教育の必要性の意識と学校への期待は、選択項目数という量的な面では差はないが、個々の項目の比較では大きく異なる。家庭で必要性の意識が高い項目は学校への期待が低く、学校への期待が高い項目は家庭での必要性の意識が低いという傾向がみられる (図 3)。すなわち、家庭での必要性の意識と学校への期待は対照的で相補的な関係をなしている。性交や避妊の方法を含めて性の身体的・生理的な事柄や科学的な知識は主に学校で、男女交際や恋愛そして夫婦の協力や親の役割など社会的・心理的な事柄は主に家庭でと考えている。親は性教育を学校任せでよいと考えているのではなく、学校と家庭の役割の違いと連携

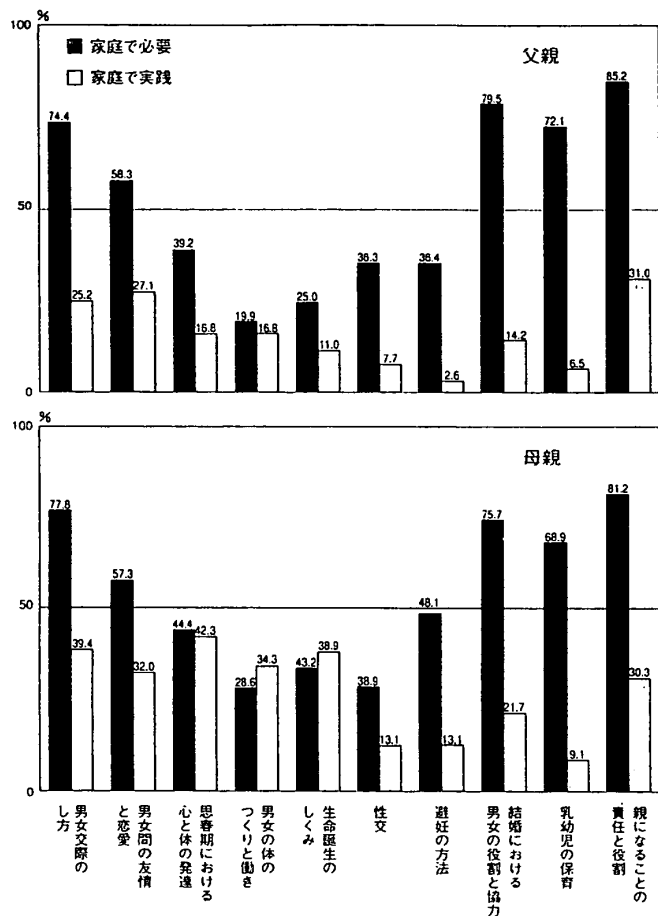


図4. 家庭で必要と思う性教育と実践の内容

を意識しているといえる。

表5から、家庭での性教育の必要性の意識と性に関する会話とラブシーン視聴への態度との関係は、父親では関連がみられないが、母親は性に関する会話への抵抗感と性描写の映像への抵抗感の双方とも関連がみられ、いずれも抵抗感のない者はある者より性教育の必要性の意識が高い。5項目のセックス観との関係については、母親では全く関連がみられないのに対し、父親は禁欲の必要性の項目との間で関連があり、セックスに禁欲的でない者の方が禁欲的な者より性教育の必要性の意識が高い。

(4) 性教育実践に影響する要因

家庭でなされた性教育の項目数の平均は父親1.6、母親2.8である(表4)。母親は父親よりも多いが、いずれも家庭で必要と思う項目数を大きく下回っている。その差は、性教育の必要性の意識が高い項目である男女交際や夫婦関係や親の役割など社会的・心理的な内容の項目で大きく、さらに性交や避妊の方法の項目で大きいことが、父親と母親に共通する特徴である。

表6. 家庭での性教育実践に対する家庭での性教育の必要性の意識と性に関する会話とラブシーン視聴への態度の関連

	父親	母親
家庭での性教育の必要性の意識	15.5***	26.3***
性に関する会話抵抗感	8.7*	2.2
ラブシーン視聴抵抗感	1.9	5.4

家庭での性教育実践の程度を、子どもと話し合ったり指導したことがある項目数をもとに3分類(0, 1~3, 4~10)し、カイ2乗検定を行った。\* $p < 0.05$ , \*\*\* $p < 0.001$ 。

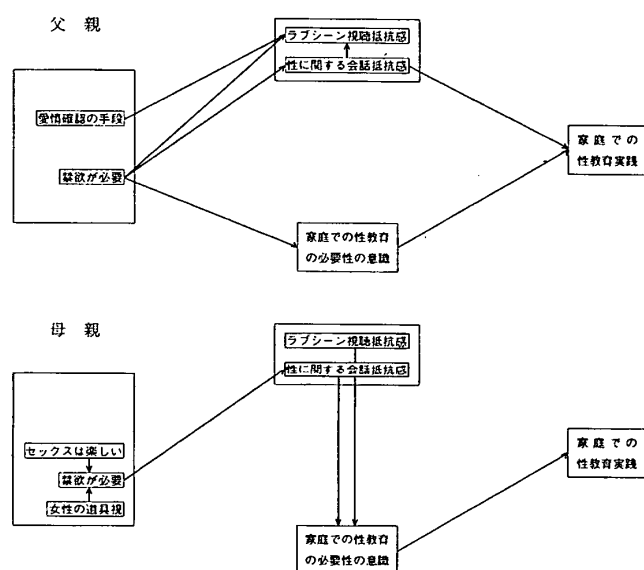


図5. 家庭での性教育実践に影響する要因

ただし母親の場合は、「思春期における心と体の発達」「男女の体のつくりと働き」「生命誕生のしくみ」の身体的・生理的な内容の3項目は、必要と思う水準を満たす程度には実践されている(図4)。

家庭における性教育の実践に対する、性に関する会話やラブシーン視聴への抵抗感と家庭での性教育の必要性の意識が及ぼす影響を検討した(表6)。抑制要因と仮定した性に関する会話や映像への抵抗感の有無との関連については、父親のみ会話抵抗感との間で関連が認められたが、促進要因と仮定した家庭での性教育の必要性の意識については父母ともに関連が認められた。家庭で性教育への取り組みを活性化させるには、性教育の必要性の意識を高めることの重要性が示唆される。

図5に、家庭における性教育実践に影響する要因間の関係を整理した。家庭での性教育の必要性の意識が

## 親の性意識が性教育に及ぼす影響

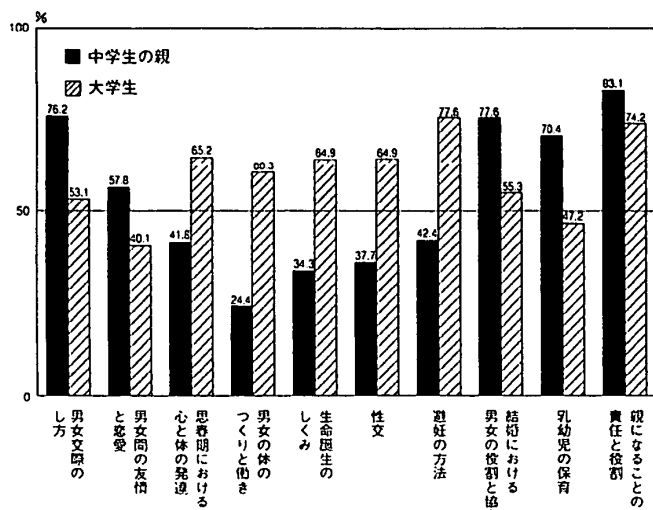


図6. 家庭で必要と思う性教育の内容（大学生と中学生の親）

低い者は高い者に比べて実践が乏しく、性教育の必要性の意識が性教育実践に影響していることは、父親と母親に共通している。さらに父親と母親に共通する点は、5項目のセックス観のなかでもとくに、禁欲の必要性の意識が性に関する会話への抵抗感に影響しているということである。ただし、影響のし方は異なる。父親の場合は、禁欲的なセックス観は性に関する会話への抵抗感を生じさせる一方で、性教育の必要性の意識を低下させ、性教育実践を乏しくする要因になっている。母親の場合は、性に関する会話への抵抗感を生じさせ、性に関する会話への抵抗感が性教育の必要性の意識を低下させることを通して、性教育実践を乏しくする要因になっている。

#### 4. 考 察

予想されたことではあるが、家庭における性教育の実践に対し、家庭での性教育の必要性の意識が影響していることが確かめられた。家庭において性教育の実践を促進させるにはまず、それを必要とする意識を高め動機づけることが重要である。ところで、家庭で必要と思う性教育の内容として選択された項目数の平均は、父親と母親のいずれも5項目程度である。それは実際になされた項目の2~3倍にあたるが、性教育の内容として取り上げた10項目の半分程度であり、必ずしも多いとはいえない。

一方、学校に期待する項目の平均もほぼ同数の5項目である。学校に期待する内容と家庭で必要と思う内容は対照的で相補的であることから、親は学校と家庭

の役割分担を意識しているといえる。学校との役割分担の意識は、学校でなされている性教育の現状から、学校で不足の部分を家庭で補うことになるので有効であるように思える。だが、それは学校に期待する事柄と家庭ですべき事柄とを区分けしてしまうことによって、家庭における性教育の必要性の意識を高めることを妨げる。

そのことに関連し、大学生を対象とした調査結果との比較から以下のことが示唆される。大学生が親になった場合に、家庭で必要と思う性教育は親から家庭でなされたと思う性教育を上回り、その差は思春期における心と体の発達、男女の体のつくりと働き、生命誕生のしくみ、性交、避妊の方法などの生理的・知識的な内容で大きい。家庭で必要と思う性教育の全体的な底上げと生理的・知識的な内容の重視に、学校で受けたと思う性教育が影響していることがわかった（高橋1997）。中学生の親世代と比べると大学生の世代では、家庭での必要性の意識が社会的・心理的な内容で減少し、生理的・知識的な内容で増大している（図6）。学校との役割分担の意識が崩れる反面、学校における性教育の現状と類似してくることが挙げられる。家庭でこそ必要という意識の低下は、大学生の世代でも学校への依存が変わりにくいことを懸念させる。

木田淳子らの調査研究によると、親と教師では性情報の取り込みと加工の効果（具体的には子どものテレクラや売春についての否定的な認識）に差がある。親による関与には限界があり、親の場合は安らぎのある家庭環境づくりとの関連が大きいことから、性教育に対する教師の直接的機能と親の間接的機能による補完の重要性が指摘されている（大阪教育文化センター「家庭調査」研究会1999）。確かに、情緒の安定が得られる家庭環境づくりは親の役割として基本的に重要であると思われる。しかし、近年の子どもを取り巻く性情報の変化を考えると、性に関する悩みや関心に応えながら男女交際や恋愛や生き方について理解させ考えさせるには、教師による指導や話し合いだけでは十分に対処できないと思われる。

家庭で性教育への取り組みが乏しい原因について、これまで多くの場合、性に関する事柄を話題にすることに対し羞恥心や罪悪感があり、とくに親と子の間では強いことが指摘されてきている。若い世代を中心に日本人の性意識や性行動が変化している今日（依田1986；黒沼1998；内野1997；千石2000；小形2001）でも、依然として性に関する羞恥心や罪悪感を崩れ難

い障壁のように考えてしまいがちであるが、親の側からみた本調査の結果に関していえば、それは一般に予想されているほど強くはない。

父親と母親のいずれも、「性に関することを人前で口にすべきではない」という考えに積極的賛成はわずかであり、その数は積極的反対より少ない。消極的賛成を合わせても性に関する会話に抵抗感をもつ者は半数程度である。会話抵抗感子どもとの間に特定した場合には強まるだろうと予想されるが、この点に関して会話と映像では異なるにしても、子どもとテレビ視聴時のラブシーン場面での態度について、平静という者が母親でも半数に達する。テレビCMや若者のファッションそれにカップルの行動などを始めとし、性表現が開放的で自由になってきている現象を反映し、視覚的性情報に対する忌避感確実に低下してきていると思われる。さらに、性に関する会話への抵抗感が性教育実践に及ぼす抑制作用についても、父親では確かめられたが、母親では直接の関連は認められなかった。羞恥心やタブー意識を崩れ難く越え難い障壁とする固定的な観念から抜け出し、性教育を家庭教育の主要課題の一つととらえて取り組むべき時機に来ているのではないだろうか。

その際に次のようなことが考えられる。まず、性に関する会話への抵抗感に対し、父親と母親のいずれも、セックス観のなかでも禁欲の必要性の意識が影響していることについてである。「性的欲求はできるだけおさえるべきである」と考えるセックスに禁欲的な者は、性に関する会話への抵抗感がある者が多い。禁欲的なセックス観は性に関する会話への抵抗感を強め、性教育実践を抑制する作用をもつことがわかった。対話は性教育においても欠かせない重要な手段である。しかし、今日のような性開放の風潮のもとでは、禁欲の是非を単に性教育の活性化の面からのみ問題にするということではできないであろう。

さらにより重要な点は、母親の場合に、禁欲の必要性の意識がセックスの快楽の否定や男性による女性の道具視という、否定的セックス観と結びついていることである。父親との間に大きな意識の差があり、夫の配慮の乏しさと夫婦のコミュニケーション不足の問題が挙げられる。親と子の間で性に関する事柄も気軽に話し合える関係をつくるには、まず父親と母親の間で、すなわち夫婦の間で性に関する事柄についても率直に話し合える関係が必要である。性に関する会話抵抗感が父親と母親で差がなく同程度にあるという本調査の

結果は、そのような夫婦関係の形成において夫が主導的な役割を担うとは限らないことを示している。ダブルスタンダードによって女性はとくに性に関する事柄に対して受け身で依存的になりがちである(宮 1984; 間宮 1991; 小倉 1995)が、妻から夫への積極的な働きかけも必要である。

## 5. 要 約

性意識のなかでもとくにセックス観に注目し、父親と母親のセックス観が性教育に及ぼす影響について検討した。分析の対象は中学生の子どもをもつ188組の父親と母親である。主要な分析結果は以下のとおりである。

取り上げた5項目のセックス観の全てにおいて、父親に比べて母親は否定的で禁欲的な考え方をもっていた。父親と母親の意識の差は、とくに快楽の肯定と男性による女性の道具視の項目で大きかった。母親では、禁欲の必要性の項目が快楽の肯定や女性の道具視の項目との間で関連が認められた。

父親と母親のいずれも、性に関する会話への抵抗感をもつ者が半数いた。子どもとテレビ視聴時のラブシーン場面において平静という者は予想外に多く、母親でも半数いた。

父親と母親のいずれも、性教育の内容として取り上げた10項目のうち、家庭で必要と思う項目と学校で必要と思う項目はほぼ同数の5項目であった。しかし、家庭で必要と思う項目と学校で必要と思う項目の内容は対照的であった。家庭で実際になされた項目は少なく、2~3項目でしかなかった。

父親と母親のいずれも、家庭での性教育の必要性の意識と性教育の実践とは関連が認められた。性教育の実践に対し、父親では性に関する会話抵抗感は直接に関連し、母親では家庭での性教育の必要性の意識を通して関連していた。さらに、セックス観のなかでも禁欲の必要性の意識と性に関する会話抵抗感との間で関連が認められた。

## 引用文献

- 藤田禄太郎(1980) 家庭における性教育、『子どもと性』、福村出版、東京、61-62  
 石川弘義、斎藤茂雄、我妻 洋(1984)『日本人の性』、文藝春秋、59、158  
 黒沼克史(1998)『援助交際』、文藝春秋、東京  
 間宮 武(1991)『男と女—性差心理学への招待』、小学館、東京、211-224



## 親の性意識が性教育に及ぼす影響

- 宮 淑子 (1984) 『セクシュアリティ』, 現代書館, 東京, 16-38
- NHK 番組制作局, NHK 放送研究所 (2000) 『「性についての実態調査」結果レポート』, 4
- 小形桜子 (2001) 『モア・レポートの20年』, 集英社, 東京
- 小倉千加子 (1995) 『セックス神話解体新書』, 筑摩書房, 東京, 18-24
- 大阪教育文化センター「家庭調査」研究会(編) (1999) 『豊かな人間性を育む家庭生活』, 木田淳子, 125-142
- 千石 保 (2000) 『「普通の子」が壊れてゆく』, 日本放送出版協会, 東京, 29-50
- 高橋久美子 (1997) 家庭における性教育の現状と課題, 家政誌, **48**, 273-275
- 高橋久美子 (1999) 中学生の父母はどう性教育をしているか, 家政誌, **50**, 621-629
- 武田 敏 (1991) 子どもと性教育, 『子どもの発達と保育・教育』, 朝倉書店, 東京, 131-132
- 東京都生活文化局 (1982) 『大都市高校生の性をめぐる意識と行動』, 東京都生活文化局婦人青少年部企画課, 191
- 東京都性教育研究会(編) (1987) 『新 児童・生徒の性』, 学校図書, 東京, 22
- 内野英幸 (1997) 一般住民の性意識と性行動に関する研究, 日公衛誌, **44**, 499-507
- 依田 明(編) (1986) 『現代のエスプリ 愛と性の心理』, 至文堂, 東京, 58-70